

## ちいさな証

苦しんでいる世界へ  
菊地 祥彦

オアシスチャペル 利府キリスト教会

「もしかすると、この時のためであるかもしれない。  
(エステル4:14)」



人生の中でこのように思う時が何度かあるのかもしれませんが。私にとって、東日本大震災がそうでした。千年に一度の大震災が自分の生きている時代に起こりました。震災の混乱から落ち着いてくる中で、自分が被災地に置かれている意味を考えられるようになりました。神様はご自身の計画の中で、震災前から東北の地に私を置き、そして今もこの東北で私を生かして下さると信じています。

私はスイスとの国境に近いFreiburg（フライブルク）に留学していた頃、2009年の6月に信仰を持ちました（JEGのみなさんにはとてもお世話になりました！本当にありがとうございました！）。そして、2010年の2月に日本に帰国し、献身の思いが与えられて2011年の4月から神学校に入る予定でした。入学の直前に震災は起きました。私の神学生としての歩みは、震災とともに始まったとも言えます。

あれから二年が経ちました。この二年間、継続して教会で設立された被災地支援団体の活動にも携わっています。「被災者の方々に仕える」ことはまったく未経験



であり、自分にとって大きなチャレンジでした。それは「“自分の世界”から“苦しんでいる世界”へ行く」と表現できると思います。自分のことを考え、自分のニーズを満たして生きる「自分の世界」を越えて、苦しんでいる人々のことを思い、苦しんでいる人々のニーズを満たすために「苦しんでいる世界」に行くのです。

そのような行動は、自分の人生を振り返ったときに信じられません。なぜなら、クリスチャンになるまではずっと自分のことだけを考え、自分勝手に生きてきたからです。

自分の夢、自分の成功を追い求めて生きる人生を生きていました。クリスチャンになったからと言って、そのような問題がすべてなくなったというわけではもちろんありません。

クリスチャンになってからも、人を愛する大切さを知りながら、苦しんでいる人々のために祈り、仕えるというのは簡単なことではありませんでした。マザー・テレサは「愛の反対は憎しみではなく無関心です」と語りました。苦しんでいる人々を覚え続け、その人々のために生きるということは罪人の私たちには難しいことであり、時にチャレンジなことです。私自身、大変な被害を受けた地域の側に置かれていながら、被災者の方々を覚え続け、祈り続けることは簡単なことではなく、忙しさに振り回されるような日々を過ごしているときは自分のことでいっぱいになってしまいます。



ある日、瓦礫だらけの変わり果てた被災地へ赴いた時に、イエス様のことを思いました。イエス様も、荒れ果てて罪に染まっているこの地上の世界に天からやって来てくれたんだよなあと思ったのです。イエス様は、すべてが満たされている天の世界から、苦しんでいる私たちのために問題だらけの世界にあえて降りてきてくださいました。

イエス様に付き従う者にとって、「苦しんでいる世界」へ行き続けるということは、大切なことなのだ体験をもって学ばされています。キリストのように生きることはもちろん難しいことですが、これからもイエス様のように変えられていくことを祈り求めながら、震災後の時代に生かされている者として被災地で貢献していきたいと願っています。みなさん、ぜひこれからも日本のために、特に被災地で苦しんでいる人々に関心をもち、お祈りください！

菊地祥彦神学生は、サッカーの監督になるために独フライブルグ留学の2年間、スイス教会の礼拝と家庭集會に忠実に通われる中で救われました。帰国し、神学の勉強を始めて間もなく、東日本大震災が故郷を襲い、身を挺して支援にたちあがりました。ヨーロッパで救われたのは、「この時のため」であったと証されています。スイスJEGでは菊地神学生を祈りと献金をもって支援しています。